

Title	“De ministerialibus” : C. L.における展開
Sub Title	The "ministerialis" : its development in "codex laureshamensis"
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.6 (1956. 6) ,p.403(1)- 415(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19560601-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

W. W. Cooper, A proposal for extending the theory of the firm.....鈴木 諒 一 (10)

木下和夫著『國民所得分析』.....鈴木 諒 一 (17)

平竹傳三著『ソヴェト經濟發展の分析』.....加藤 寛 (26)

中世末フランスの貨銀研究の諸前提.....波邊 國 廣 (26)

“De ministerialibus”

—C. L. における展開—

宇 尾 野 久

序

「フランスの文化を知らずして中世のドイツ文化を語り得なからず、一方と比較せぬならば他方の性格は理解されなからず。兩國の身分關係の明瞭な區別は、フランスに何等本來のミニステリアルリテートがなかつたことにある。そこへドイツに於ける様に明瞭に現れなかつた」⁽¹⁾と Paul Kluckhohn (P. K. abgekürzt) は既に一九一〇年に述べている。この事はその後幾多の検討を経したが現在も尚その意義の大半を失つてはゐない。Ministerialität (Mt. abgekürzt.) に関する P. K. の見解が一つのキヌマを採つたためには勿論、Ganzemüller, Die Handrische Ministerialität bis zum ersten Drittel des zwölften Jahrhunderts (Tübinger Dissertation 1907). August von Furth, Die Ministerialen (Köln 1886). Georg Waitz, Deutsche Verfassungsgeschichte V. 2. Aufl. (Berlin 1893). Georg von Below, “Ministerialität” im Handwörterbuch der Staatswissenschaften.

“De ministerialibus”—C. L. における展開—

Heckmann, Zur Entwicklungsgeschichte der Ministerialität (Dissertation, Halle 1895). Zallinger, “Ministeriales und Milites” (1878). Jäger, “Geschichte der landständischen Verfassung Tirols.” Luschin von Ebengreuth, “Österreichischen Reichsgeschichte.” Mell, “Zur Geschichte der Landstände im Erzbistum Salzburg.” Heusler, “Deutsche Verfassungsgeschichte.” Caro, “Beiträge zur älteren deutschen Wirtschaftsgeschichte.” Wittich, “Altfreiheit und Dienstbarkeit des Uradels in Niedersachsen. 1906. Heck, “Der Ursprung der sächsischen Dienstmansschaft.” (Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte 1907.) 等の諸見解がその背景となつてゐる。然し P. K. は一つの公理 (Theorieaxiom) と合せてその妥當性を補強する全く新生面に缺けたやうな新理論のゆりかげで職れると言つた方法をとらなからず、彼自身東南ドイツを中心として Urkunden 及び (その Zeugenlisten を含む)

寄進帳 Dichtung; Lied 等の獨自な探究を行った。そして Mt. の問題を Verfassungsgeschichte⁽²⁵⁾ の問題として扱っている。然し乍ら初期の開拓者に見られる如く彼にははまだ研究方向が確立されず Waltz の問題點が前面に押し出されている。従つて彼は Mt. の研究の Ausföhrung des Standes (I Teil II) を問題とし乍らもその形成期——十二・十三世紀の史的なディナーミクつまりザリアー・スタメンターの Verstaatung 及び Babenberger, Otokar の Landesherrlichkeit 形成を背景におしやり、靜態的、構成的な事態の推移をもとめけるというた方向をたどる。しかも P. K. は A. Dopsch, K. Bosl の如くミニステリアル・ライヒスミニステリアルと Dienstlehn (Rittergut), Reichsgut の相關の中にその實態を見せようとして G. Waltz の Stände 形成の動きの中で Ministeriales の機能(主として軍事的機能)を確定し、Mt. 成立の根源をここに求める。August von Fürth (Die Ministerialen) が Hofdienst と Mt. の緊密な關連を主張するとき、對して彼が Ministerialis の主たる軍事的機能を主張するとき (Bede が災害又は軍事的要求から起り、 Familia ministerialis が Familia militaris と包括されると言つて) 軍事が生活の大部分を占めていた時代には) それ自體當然のことである。然し乍ら オーストリアの Mt. の特殊性を別としてもそれはいまだ Ministerialis の主たる史的役割を盡したとは言えない。勿論 K. Bosl の Reichsministerialen を政治の Werkzeug としてまたは Salier, Staufier の政策の擔い手として理解せんとする方向に對しては Gero Kirchner が批判したように Staufier の中

央集權化を妨げる各ラント諸集團の社會經濟的自立性と自生的ヘルンシャフトの分散化の阻止的傾向が作用し、最初から(第二帝國の史家が志向した如き) Reich の Einheit のもとへの各ラントの Die eine Einheit を上からの絶對的要請として措定し得ぬ困難な諸事情が伏在している。従つて K. Bosl は G. Kirchner の批判に對して「個と史的過程」の關連を Verstaatung の方向で強調する譯であるがここにこそ現代中世史學の政治、法制的傳統と社會經濟史學の要請の激しい方法上の接觸がみられる。⁽²⁶⁾
社會政治構造の變革と各シュテンデの關係が全體への個の包攝としてのみ作用せず、K. Bosl の悲願たる各個の全史的過程への相互作用まで内包しようとする時確かに政治の志向的媒介を俟つて初めて可能となることは了解される。然し Klaus Verhein の再度に互るカラリングの Reichsgut の劃期的研究における如く既に社會經濟過程と文化過程(いわゆる Aufbau) を不可分とみる見地からの批判をもつてすれば K. Bosl の研究も亦一層の内包と密度を必要とし、史的理解と作業の無限の深さが痛感されよう。⁽²⁷⁾
“aristokratisch-hochkirchlicher Prägung” (Heimpel) をディーン史の(1) Personenverbandstaat から Flächenstaat (Theodor Mayer) への過渡期における各シュテンデの史的創造力を如何に評價するかは至難の業と言わねばならぬが益々關心の持たれ始めている中世近世における自由と非自由の意義の探究は必然的に問題をそこまで前進せしめることになる。然しその際 Osswald, ein Schüler Seeligers に對して放つた A. Dopsch の批判——Grundherrschaftstheorie 批判の一定の Schlußaxiom

の形成といつた豫め決定された方向での論證が如何に歴史の基礎をゆがめるゆえんであるかが深く反省されねばなるまい。そしてそこから批判の自由と批判の原則の問題が生まれてくる。

1

P. K. は Mt. の成立を後ロマンチック時代における宮廷の官職 (minister, ministerium, officium = ambacht-Amt)⁽²⁸⁾ と求め、その主たる Fürth の Amtstheorie を據つて(1)の官職をオーストリアの宮廷儀式の影響を受けつけたものとする (Migne, P. G. Bd. 157) (Du Gange, Glossarium Graecum p. 1463) また(2)の官職は種々な Dienst であり、種々な Stand の Dienstman を纏へる(3)の官職は Mt. 自身 Stand とは言ふ得ぬことを主張する。Brevium Exempla の成立事情に關しては Wolfgang Metz は “Ambacht” は Der fuldische Vocabularius Str. Galli の Villicus と譯すべきであり、ロマンチック文書における “ambeth” は伯の職權であるが同時に他面 centurio 及び tribunus の職權でもあり⁽²⁹⁾と述べている。したがつて P. K. は Geburtsstand, Berufsstand がするに Mt. の制度の中に混在していることを正しく指摘している。しかしそのような官職を生んだ宮廷儀式は西フランク(フランス)で重要性をもつたが西ヨーロッパ(特に高地・低地ドイツ)では必しも排他的に一定の Hofamt と結合せず、十二・十三世紀における Stand の展開とドイツ自體の史的諸事情の中で Ministeriales がその機能轉換を遂げたことを確定する。そして中世に於ける ministeriales の Stand をニールンゲン歌

以來の傳習の中で檢證し、併せてその地域的個性を検出してようとする。一體そのようなものとして見るべきドイツにおける Hofamt はカラリングのルネッサンスの中でどのようなものと現われてくるか、對して Hinemar (De ordine palatii C. 5.) は、そのうち、tri des palatium 及び camerarius, comes paratii, seneschalcus, buticularius, comes stabuli, mansionarius, venatores, principes, falconarius, comes stabuli, mansionarius, venator, camerarius (Kammerer), marescalcus (Marshal), dapifer (Truchsessen), Pincerna (Schenken) 及び Ministerialis の Hofamt の中心部分であると述べている。P. K. は Hofdienst 及び(4) Reichsmarschall, Truchsessen, Schenken, Kammerer, Kuchenneister⁽³⁰⁾ を擧げている。其の既述の如く、regnum Teutonicum の各民族は英獨佛及び後期中世の各ラントの地域的相違、王、聖界、俗界、君主の Hofamt の相違があるとして、それ等の官職が Titel, Dienstlehn の形を採るに至る迄の奉仕の機能には共通點がみられる。然し乍ら軍事奉仕(騎馬軍役)と ministeriales の Stand 形成の主因を求める P. K. は K. Bosl の主張は Ministeriales の機能轉換に止まらず後者が A. Dopsch-O. Brunner, Theodor Mayer, H. Mitteis, Heimpel の國制研究に對して Reichsministerialität の展開——「所有史的系統的方法の助けによつてドイツ王國の結節點に於ける王の Mt. の機能とその國政上の挿入物の發露としてのその内的發展及び一般的政治發展の運動を描き出すように努めなければならぬ」との立場をとる點にある。従つて P. K. の苦心の結晶として作成された次頁の表も彼が

Statistisches Verhältnis der Ministerialen zu den freien Kreuzfahrern.

	Herzöge und Grafen	Freie	Ministerialen und milites	Unsicheren Stand
1096—1146	9	5	2	5
1147—1149	22	12	37	7
1149—1189	16	4	39	4
1189—1191	16	16	29	1
1192—1202	10	1	5	1
1202—1217	1	—	13	1
1217—1221	16	1	40	1
1227—1229	—	—	2	—
1230—1250	3	—	4	—

P. K. ibid., S. 246

1096—1146	Freie	71%	Ministerialen	29%
1147—1149	"	24.5%	"	75.5%
1149—1191	"	23%	"	77%
1192—1250	"	3%	"	97%

意味づけられた軍政の終極としての Reichs-Landfried の運動における Ministerialis の Stand の政治経済的・非自由→自由の展開の外

に東南ドイツを中心とした Landesherlichkeit の伸張のマンクマールとしての意味をもつことにならう。
オーストリアでのこの過程は就しては A. Dopsch の Reformkirche und Landesherlichkeit in Österreich. 及び Die Bedeutung Herzog Albrechts I. von Habsburg für die Ausbildung der Landeshoheit in Österreich (1282—1298) に於いて劃期的な検討をなしてあり、(か)つ彼が Anianische Klosterreform Ludwigs des Frommen 及び Brevium Exempli の成立の不可欠の条件とみた如く、(こ)で経済支配と不可分の聖界を含む政治的 Stand の運動の起伏が再考されねばならぬであらう。

K. Bosl に依れば Dienstman が守護 (Vogt = advocatus) と任用される場合が頻繁にあらわれる。従つて Das Hirsauer Reformprogramm 及びその Eigenkirchen の問題を完全に解決せず君主の Vogtei からの解放の問題を一一二三年のウァルムス條約 (Das Wormser Konkordat) 後迄も持續して行つてことを考ふる時 Markministerialen を含むべきに Mt. の聖界並びに俗界所領に於ける意義も亦 Investiturstreit を轉機として歴史のデナナーミクの中で大きな轉換を遂げること考慮せねばならぬ。
然しクルニーの改革精神に發したヒールサウ教團の改革運動がドイツの傳習 (mos teutonicus) に反して課れる革新をなし、聖堂を政治的場中の投げる (C. L. K. 142b) を痛罵して Die Hirse (militum) と對抗關係にあらうて修道士の自治的選舉母體の中心の修道院長の自由選舉を要望せるロマンチック修道院長は、歴代の皇帝から

諸種の特權を興えられ Reichsgut を記載管理しており、例え Reichskirche Worms の進田と認進つてメタマンナーの Lorsch-er Vogtei 獲得による侵襲を受けたとしても勿論之を事情を異にして了解。

II

封建の Ministerialis の制度が聖界に採用されるまでのロマンチックな Mt. の形成とあつては前述の Ambeth による Mt. の高級 ministerialis への進出の諸條の Dienstman 及び Servientes, servitor の形をとり現れてはる。Karl Glöckner が、特に Der Ministeriale の内容をめぐつて現れたる諸條のト録 Dienstman についてその如き資料を編纂してはる。

- (1) Urk. Nr. 95 Z 38 (anno 1023, Dez. 2). De servientibus episcopi et abbatibus. (Edictum Heinrich II. inter wormaliensem et laureshammensem familiam.)
- Urk. Nr. 134 (anno 1094). De servientibus: Heribertus,¹²⁾ Salemannus, Tietericus, Hildebertus,¹³⁾ Arnoldus,¹²⁾ [12) Ohne Titel nr. 119 (um 1085), wo weitere Belege]
- Urk. Nr. 143 (Z 29-30) (anno 1130). De servientibus (Laureshamensis): Arnoldus, Fumhardus, Gernod, Hartbertus. (Commutatio inter fratres laurissenses et fratres S. Stephani et alia plura.)
- Urk. Nr. 154 (anno 1142-1148). De servitoribus: Cunradus, Craft, Dragebodo, Giselherus, Diedericus. (De Vico

“De ministerialibus” — C. L. による展開 —

Celle).

Urk. Nr. K 164 Z 44. (anno 1167 Sept. 28) (dedit). Servientibus suis XX (marcas-Geld).

Urk. Nr. K 164 Z 45-46 (anno 1167 Sept. 28) (dedit) item duobus militibus qui ei servierant, duas scutellas argenteas (De fine vite et testamento ipsius Heinrichi abbatibus).

封建の ministerialis と同様に milites (軍事奉仕者) としてあらはれる。(木)がロマンチック時代には、gregarius miles-Privatsoldner の程度に知られてはる。K. Bosl. ibid., S. 89-90.)
更に K. Glöckner が Urk. Nr. 134 の語に servientes 及び Titel へ進出してはる。国文書中の ministerialis の語 (134, Z 3, Z 34) の出現とあつてはる。(法的に確認された ministerialis の) Stand 及び Amt への進出してはる。その同文書に於いて De militibus; De servientibus; De familia の Zeugenlisten 及び區別して述べられてはる。Urk. Nr. 1147 (anno 791, April 12) の語にあらはる。十一世紀の後半に初めて Ministerialenrecht に含まれるべきは、Ministerialis 及び officia camerariorum (驛房の臣) の職を遂行してはる。K. Glöckner が、更に Titel へ進出してはる。Lorschener Kloster の die echte Grundherrschaft の語にあらはる。ロマンチックな Jus ministerialis への進出してはる。その聖堂の實質的な自治的 Herrschaft の形成が政治的諸勢力との争、修道士の協同意識の強化、對外的政治経済支配の充實によつて初めて實現されることとなる。

(2) Ministerialis がそれ自體の名稱を取得せる事。

1) Benante, Urk. Nr. 153 (anno 1148 vor März 13.) De ministerialibus: Quonradus, Bertholdus, Gernodus, Burkardus, Hildebertus, Berewelf, Rurnhart, Ingram, Diedericus, Craft, Emicho, Engilfridus, Gebehardus, Winnarus. Urk. Nr. 158 (anno 1165) De ministerialibus: Wernherus de Wormatia, Ingram et Rurnhardus de Hantscushelm, et ceteri quam plures.⁽²¹⁾

2) Unbenannt. K 79 (an. 975) Ann. Hic eciam constituit ut inter ministeriales et familiam in Bruomath compositio que vulgo dicitur wethhe in qualiqueque (1) causa non nisi ad quatuor denarios illius monete procedant (1) — Otto 1 Totenbuch. (inter.....et—sowohl.....als auch.)

「元來後に始るに權證の事は [von 1071 (Nr. 131, Z 8) ab.] 權證の Ministeriale (Mn. abgekürzt) たるの證はどつては權を以て授けらるべし」(K. Glöckner, K 79, Ann.) — 「大抵上流の兵へ Capitulare de villis (C. 10, 41, 45, 47) Brevium exemplia 以下に於て Mn. 以下はどつては〇〇半額以下に於て」⁽²²⁾

K 124 (anno 1063) Milites ecclesie tam ministeriales quam nobiles. 武裝の Mn. たる nobiles たる權證の事はどつては自由の非自由の Geburtsstand の家系によつては、兵の兵の Heerschild 以下たる milites (Ritterschaft) 兵の軍役の權證の事によつては milites ecclesie たる家系によつては Urk. Nr. 5 (anno 772 Mai) nec ad homines suos, tam ad ingenuos quam et ad seruitentes, seu accollatus ipsius monasterii

以下たる部族法からの過渡的な自由、非自由の表現より一層封建化された表現となる。従つてその際永く Geburt の尾をひくとする Stand の上と運動の Friedrich Barbarosa の Constitutio de pace tenenda von 1152, constitutio contra incendarios von 1186 を契機として一應確定された後期のマンナ族の Heerschild の概念をこき破つて進む場合も頻繁に起り得る。Stand が元來全構造の (ganz baulich) である如く⁽²³⁾ Mt. 自體 Stand の非常な振幅を有し、その中心の傳習は依る Liber (Edelfreie), seruitentes (Unfreien) と新たな形成される Stand の (結婚、役職を媒介として) 複合的な内容を示すからである。然しマンナの傳習を暫く措くとして右のマンナの平衆が後田 (Doppelvassal) の排除を目的として如く Heerschild 以下たるのマンナの自體の地位の振幅を縮め、1) の Heerschild 以下たるはどつては、Doppelministerialität の如く 1) の職權を同時兼任する如き性質のものをなす。Mt. 以下の封建構造の問題は史的役割を見出す。

Urk. Nr. 131, Z 8-9 (anno 1071, Juni 29) nec non fratrum ministerialium, ac fidelium nostrorum consultu. (崇聖の何人ぞ Mt. たる fidelium たる事なき) 以下は Mt. たる officium (職名) として理解せらるべし。たつて Mt. たるマンナは Amt 以下は 1) 三田記に軍事奉仕を媒介として Stand たる Lehn 以下は P. K. の結果論たる策の不充分なる。以下は曼の職權の具體性によつて Salier, Stauffer の Reichspolitik のマンナマンナ領主階級の

マンナの職類の Gefüge の事は Mt. の史的役割がその本質を一層明確にする。その Lehnexer の Gefüge たるマンナマンナの Homo ligius 以下たる prévôt, baile 以下はマンナマンナマンナ sheriff 以下はマンナマンナ ministerialis の總稱たる以下の區別せらる。

Urk. Nr. 134. (德譯)

Urk. Nr. 142 Z 32 (anno 1111) et ex eorum conspirationibus omnis familia sancti Nazarii, videlicet ministeriales et huobarii omnes, depredati sunt. (以下は) 以下は Mn. の Stand の 以下は 以下は

K 143 a. Z 5 (an. 1107?) fratrum ac ministerialium ac

precipuei Bertholf iunioris aduocati conspirantibus odiis. Urk. Nr. 144, Z 8 (anno 1141) ut de predicti loci administratione (Abtwahl).

Urk. Nr. K 150, Z 5 (anno 1141-7) ministerialium, ac fidelium suorum consilio.

Urk. Nr. 150 Z 16 (an. 1147 Jan. 30) exceptis his quei de predictis villis homines seu ministeriales laureshamensis ecclesie iure beneficii ex antiquo possident.

Urk. Nr. K 155 C. (anno 1160 Febr. 4-13) Z 45, fratrum ac ministerialium.

Urk. Nr. 158 Z 20, ne quis eos seu de familia, seu de ministerialibus ecclesie nostri. (Beauftragte des Abts seu de familia seu m.; liberi, m.)

“De ministerialibus”—C.L. 以下たる區別—

Urk. Nr. 161, Z 19, 20. (1166 Sept-Dez.) Craft-7, Giselherus-7, Arnoldus-7, ministeriales, (5) nr, 3833, 3810 (Craft) 6) nr. 154. 7) nr. 163.] (monachi, m. familia.)

Urk. Nr. K 163, ex consilio abbatibus sui ac ministerialium hoc eum fine deciderunt. (De Curia Wormatiensis.)

Urk. Nr. K 164, Z 61 (1167 Sept. 28) ministerialium.

Nr. 1147 (an. 791) verfalscht; optimum ius ministerialium, id est officia camerariorum. (德譯)

Nr. 3671. (entstand das Urbar zwischen 830-850.) mansum I habet ministerialis. (Lorscher Reichsurbar). (Um Gernsheim)

Nr. 3813. Diethricus ministerialis. (15) Nr, 153 f (1148)] 以下は 以下は Diethricus ministerialis たる Berolfum の 以下は 以下は Heppenheim 兵の 以下は 以下は Heimbach 以下は 以下は decimas 以下は 以下は novalis たる Diethricus たる ministerialis たる 以下は Decima たる 以下は 以下は Nr. 153 (Diethricus) 以下は 以下は

Nr. 3821 Ingram de Henscushelm ministerialis huius ecclesie cum uxore sua Heilika tradiderunt S. Nagaris calicem deauratum..... (1) Nr. 158—ministerialis Laureshamensis—anno 1165] Nr. 3833 (an. 1195) De ministerialibus: Craft, Arnold-

以下 (五〇六)

do, 6) Nantoho, Heinrich de Hephenheim, Heinrich de Isenbach, et coram aliis quam plurimis. [6] vgl. Nr. 161 (1166), Nr. 163 (1160) De ministerialibus laurishamensibus: Cunradus, Bertholdus, Gernodus, Burkardus, Hartlieb, Hildebertus, de Winenheim, Craft, Arnoldus, Giselherus, Hildericus, de Besinesheim, Rurnhardus, et Ingran de Hensuesheim.]—(Zeugen in "Urkunde über einen Freikauf") (Nr. 161, 163) またそのロマンテ諸侯の Arnoldus ministerialis が Villa Besinesheim 内の土地を賣戻しその代りに葡萄酒を贈答に反對給付し、その果實を納めたこと(注文) 次は Minister といふ名の文書が現われる。

Urk. Nr. 164, Z. 57. (anno 1179, April 7) Ego Cunradus salzburgensis ecclesie humilis minister et sabinensis episcopus subricripsi. (Privilegia Alexandri pape tertii) 但十一・十二世紀に於て Der Edelreie を意味する liber、及び大體非自由な出自の milites, ministerialis (servientes), familia が大抵 Stand の序列に於て Zeugenlist に入れられ、最後は P. Kluckhohn が末期ロマンテの Ministeriales の語の起源を論じて、Hofantler—Kammerer, Marschall, Truchsessen (<truchsessen), Schenken 及び K. Bosl 及び Kuchenneister を理解して、その語はロマンテにノットン^ノ諸侯 Camerarius, marscalcus, dapifer, pincerna [πικερνικος (πικρα)]、butticularius 及び C.L. といふ語の派生であると云ふ。

Nr. 3810 (um 12 Th.) Craft dapifer.

Craft dapifer 及び Craft 等は ministerialis Craft [Nr. 153 (1148), Nr. 163 (1160), Nr. 161 (1166), Nr. 3833 (1195)], servitor [Nr. 154 (um 1140)] 等に同一人の題名を有す (K. Glöckner)

4) Pincerna (Beiname)

Nr. 3813 (12 Jh.) Giselherus pincerna.

Nr. 3818 (12 Jh.) Giselherus pincerna.

Nr. 3836 (12 Jh., um 1185) Giselherus pincerna.

Nr. 3822 (um 1195) Burhardus pincerna.

以上は十二世紀のロマンテ諸侯の pincerna 及び Beiname の Hofant の名を考へたもの。この語 Nr. 3671-3677 の Lorscher Reichsurbar における士族及び上級 Reichsministeriale の場合と區別せねばならぬ。その語は右の出自となへ、ロマンテ諸侯の稚兒を勤めたのである。

5) butticularius 記述なし。

勿論以上の主要な ministerialis の外に王、聖界、俗界諸侯の仕人は尙多數存在する。Capitulare de villis は王又は王妃の名に於て莊司に命令する高級 ministerialis 及び sinescalcus, butticularius (C.V. 16) から聖堂の膳番に至る下級仕人まで全く御料地令がその名を擧げるのが煩わしく (C.V. 46) と述べている程多くの ministerialis が存在した。その若干のものを C.L. の中で求めると左の如くなる。

aucpatus (Vogelfänger) (K. 123 C Z 14), advocatus

1) Camerarius

Nr. K 143 b, Z 6-7 (anno 1125 April 25) Diemo ex Laurshamensi Camerario in abbate eligitur. [Übersicht der Äbte und Grafen 以下は Diemo 及びそのロマンテ諸侯の (1125-1139 Mai 2, Nr. K. 144) の語]

Nr. 143. (an. 1130) Et de monachis, Diemo Camerarius. (Zeugenlist) 語の及ぶ Abtei 及び荘園の Diemo が總てに Camerarius の Titel を振るべきこと(註)の office の總管者として、また荘園の出自の及びある。因て此の文書末尾には "Marguardus solo nomine monachus scripsit hec feliciter, Amen." といふ語がある。[Winther (1075-1088) Gebhart (1105-7) 語ロマンテ諸侯の長を著す。その語は Camerarius が行動する所へ、ロマンテ諸侯のロマンテ諸侯の總管者である。] (K. 143 a) またその年次記の諸侯の總管者の自立的結合の語を、諸侯の地位 (出自) を著す語とする。

Nr. 3820. Camerarius (solut) V solidos de VI (houestede) (Nr. 3832. areae id est houestete. Nr. 157. aream id est Hovestrat. 等) (諸侯無役)

2) marscalcus 記述なし。

3) dapifer

Nr. 157 (an. 1165. Aug. 14-31) Z 17-18. unius huobei decimationem a Craftone dapifero nostro beneficiali concambio redemptam. (concambium = commutatio)

(Nr. 3660, 2702,.....) archicancellarius (Nr. 121, 126,.....), cancellarius (Nr. 37-39, 42-44, Königsurkunden, Nr. 122, 136) (pubulcus et porcorum custos, Nr. 3682, Rinderhirt), argentarius (C.L. 以下) cubicularius (K 120), molnarius (Nr. 139, 216,.....), monetarius (= officium) (Nr. 3816, Giselher ministerialis の語) farinarius (Nr. 1, 12, 13,.....) cellarius (Nr. 161, 3682,.....), actor (agentes) (Nr. 245, 319) [venator-venare, venatio, Nr. 92 (Heinrich 11 de banno forastis in Otenevalt) Nr. 93, 135,.....], forestarius (Nr. 55, 3673/74a, 3824f.) (falconarius. C.L. 以下) scabines (= Schoffen) (Nr. 228, 532), notarius (Nr. 23f. 29, 31,.....), magister (Nr. 119, 134), index (Nr. 16, 184,.....), vilicus (Nr. 139, 143,.....) miles [Ritter (hörig oder edel)] (Nr. 134, K 142,.....), fabreferi (K 17, K 96,.....).

以上は ministerialis の職能を總てに、行政、軍事、文化等の全機能を網羅する。然し以上の職能は即座に中世の説教書に於ける die kirchliche Standtheorie の神に定めた職分に合致しない。そして如何に中世の ordo ecclesiasticus et ordo saecularis が嚴格であるとして、その法定的に制定すること(註)の煩わしさを著す。例へば Sachsenspiegel (Landrecht) (I. C. 3) の如く、Heerschild に分れるとして、此の規定自體俗人諸侯が聖界諸侯のワザルとなることにより Heerschild の變動を許さず。この語は既に封建社

會内部における現實と Standideal の分裂が不可避の状態にある。中世の Stand 自體が O. Brunner の指摘するように社會經濟的 下部構造に對する上部構造ではなく政治、經濟の ganzer Bau の 統一的な制度として存在し、政治、經濟のディナーミクがこの制度 に強力な作用を及ぼすからである。

K. Bosl が中世法の保守性を考慮し乍らも「經濟は法より強し」 との如く Reich, Land の内的外的な Gefüge に生じた mi- nisterialität の軍政、經濟的展開は Investiturstreit → Land- fried を政治的轉機とし、都市、農村の經濟的發展と相俟つて中世 的秩序 (Lehnrecht, Landrecht) に巨大な作用を及ぼした。そ して P. Kluckhohn はこのラントの平和こそ ministerialis の Stand 形成の最大の契機となつたとのべている。P. Kluckhohn が Mt. 形成の主因を十一、十二、十三世紀における軍役に求める 点 Gottfried, Reichslandfried に到達したときそれは概念に おける矛盾ではなく歴史の現實の運動を把握したものであり、その 聖俗兩界における共存の意味をもつものと受取るべきであろう。 教皇、ドイツの諸教團、帝王、諸侯の強烈な力の充實と接觸の中 で保たれた神及ヒマンの平和はまさに戦つとられたものであり、 この戦いの中で形成された後期の ministerialis はローマ末期の elite たる novus homo とは異なるべきである。

Deutschorden の創立者 Hermann von Salza 及び Rei- chsministeriale の出資をめぐつたラントの平和を雄辯に物語つ ている。

K. Bosl がそのよきなサリノー・スタマンノーの Verstaatung

の現實の擔い手として大きな史的役割を果たした Reichsministeri- alität をドイツの全域にわたつて検討した後にその史的個性を通 して全ヨーロッパ史的展望への抱負を述べるとき必しも行き過ぎに はならないように思われる。夫々の國民文化の相互理解と比較検討 の上に立つて歴史を再構成すると言つた基本的態度は歴史の轉換に 立つ世界史像形成の原則として承認され得よう。

一九五六年一月八日

筆者の生來の不明にも不拘多年にわたつて貴重な資料を貸與賜つ た上原専祿教授の變らざる御好意に深謝する。

(一) Paul Kluckhohn, Die Ministerialität im Südostdeut- schland, S. 1, 1910, Weimar.

(二) Vgl. Karl Bosl, Die Reichsministerialität der Sal- zier und Stauffer, Teil 1, S. 25-31.

(三) Deutsches Archiv (D. A. abgekürzt), 1954, Heft 2. Vgl. K. Hampe, Herrscher Gestalten, 6 Auflage, S. 344-350.

(四) Vgl. Ein Forschungsbericht von Friedrich Lütge, Zeitschrift für Agrargeschichte 3, Jahrgang/Heft 2.

(五) H. Brunner, Deutsche Rechtsgeschichte, 11, Bd. S. 107.

Schiller-Rubben, Mittelniederdeutsche Wörterbuch, 1 Bd.

Lexer Mittel hoch-deutsche Wörterbuch, 1 Bd.

P. Kluckhohn, ibid., S. 14.

(六) G. Waltz, V.G.V. S. 323.

(七) Elias Steinmeyer u. Eduard Sievers, Die althoch- deutschen Glossen, 3, 3, 4.

(八) Glöckner, Codex Laureshamensis. Urk. Nr. 3684 b. (anno 770, Febr. 22.)

“qui dicitur Suigeres ambeth.” Urk. Nr. 3756 a. (anno 790, Mai 26.)

“Suieger comes” (Lahngau, Wetterau.)

(九) D. A. ibid., S. 415.

從十三世紀以來 officium vel ministerium はラントに於て “ambacht” と翻譯せられた。H. Pirenne, Gesch. Belgiens 1, 109—K. Glöckner, ibid., Bd. III—Wortregister.

(一〇) K. Bosl, ibid., S. 614 (II Bd.) A. Dopsch, V. u. W. G., S. 404.

Capitulare de villis imperialibus, 16. Art. 12 sine scal- us, butticularius 及び ministerialis として種族別の特權 ministerialis と命令を如く述べられている。

(一一) K. Bosl, ibid., S. 16. 勿論ラントは世界史的に世界の Herrschaft とは異なる。

(一二) Wolfgang Metz, ibid., (D.A. S. 409) 勿論ラントは 宗教性ではなく視野が問題となる。

(一三) A. Dopsch, V. u. W.-G. S. 67.

“De ministerialibus”—C.L. における展開—

(一四) K. Bosl, ibid., 1. S. 20.

(一五) D. A. (Zur geistigen Welt der Anfänge Klunys. Von Kasius Hallinger.)

(一六) C. L. Kap. 142 C. Z. 17. Hirsau の變遷。

(一七) K. Bosl, ibid., S. 283-4.

(一八) ロマンの Mt. 及び Otiens, famulus とは同義である (K. Bosl, ibid., S. 615 參照)。

(一九) Urk. Nr. 119. (anno 1084-1088) Sigelao preposito et custode, presentia testium, quorum nomina subseri- pta sunt. Arnold,⁴⁾ Hezzel, Herbertus,⁴⁾ Goderbertus, Merbodo, Diegoz, Berolf, item Berolf, Hildebrant,⁴⁾ Walprant, et multi alii. (4) は本文 12) と同一人である。

(二〇) die reale oder echte Grundherrschaft はラントに於て 荘園の Hofrecht 及び貢納義務を負える農民が主人に直 接臣屬する ein reines grundherrliches Verhältnis. 及び國 際的な F. Lütge, Deutsche Sozial- und Wirtschaftsge- schichte, S. 99.

(二一) Urk. Nr. 161. (an. 1166, Sept. Dez.) Craft, Gisel- herus, Arnolds, ministeriales. Urk. Nr. 163. (an. 1160, April) De ministerialibus wormaciensibus. Sigefridus, et frater eius Burkhardus de Steine, ……

(二二) Klaus Verheij, D.A. (1954-1955)

(二三) Einschildritter.

(二四) K. Bosl, ibid., S. 12, S. 603.

- (25) Otto Brunner, Land und Herrschaft, S. 460-461.
- (26) der erste Reichslandfried Heinrichs IV. von 1103, Constitutio pacis des Reichstags von Roncaglia (1158) を含む。
- (27) 然しこの Heerschild は(聖界諸侯への俗界諸侯の Lehn, Vassal 關係) 外國君主への Aftervassal 關係を統御し得ず) ドイツ封建制(ローン法)の Vassalität の Gefüge の大きな間隙をみたすことができなかった [Sachsenspiegel (Landrecht) I. 3.]。Mt. 41) の Lehnexclusio の間隙を充たすためのドイツの意味ではない。
- (28) Marc Bloch, Rois et serfs, p. 34 Prévôts (dans le Nord), bayles (dans le Midi).
- (29) Homo ligius の制度が Mn. を(帝國直屬の) Vasal とする(従って Dienstlehn を freies Lehn として Mt. を知行化する)ことにより十三世紀以來フランスよりドイツに一部傳波した。(Bosl, ibid., S. 592.)
- (30) 「上記マイラージキロマン聖堂の家人もしくは仕人が恩貸法で保有せるものを除き」とあるが十二世紀に於ては beneficium のみならず feudum (Dienstlehn), hovelan (Hoflehn) を titulo feudali の ministeriales が保有する際とはかかる土地には一定の貢納負擔を負わせた Vasallenlehn, freies Lehn からの區別される。然し十三世紀にはむしろこのような Lehen は存在しなくなる。(p. Kluckhohn, ebenda, S. 73.)
- (31) 形態は本質の現象であり両者は不可分であることが屢々示

- す。
 - (32) O. Brunner, ibid., S. 451 ff. a) Die Lehre von den mittelalterlichen Ständen, 及び Klerus, Ritter, Bauer の三つの Klerus-Herren-Ritter-Bürger の階級を Bauer を加えて五つの階級 Bauer を多くの場合 Stand に加えてはなす。世俗的の ordo として gravan, frien, dienstman 及び künige, graven, herzogen und manie richer barun. (P. Kluckhohn, ibid., S. 123.) を含む。
 - (33) K. Bosl, ibid., S. 37.
 - (34) K. Bosl, ibid., S. 28.
 - (35) K. Bosl, ibid., S. 184.
- Otto Schnizer, Deutsche Geschichte fürs deutsche Volk, S. 120-S. 121.
- (註) Mt. の Stand への轉化と場合、勿論 Heerschild の中の上級又は下級 Mn. がその ministerialis として扱われると言いつつはなす。上述の如く Aftervassal, Afterlehn の排除と異なる Dienstlehn の echtes oder freies Lehn への融合、Mt. の役職の世襲化に伴う知行化を媒介として ministerialis の Vasall を融合する言を述べ。従ってその結果 Heerschild 及び Mt. を Herren (Adel) [dux; comes, liberi barones]; einschuldige Ritter としてのみならず。しかしかかる Lehnwesen の強さによる Reichsgut が知行化され、Gerichtsherrschaft, Vogtsheerrschaft の形成と共に帝國直臣の創出と逆に封建制そのものが弱体化されて行く

いた傾向が生れる。〔但 Das Dienstlehen (Beneficium) が通常 drei Königshufen の大きさ (K. Bosl, ebenda, S. 41) であり、また Reichsministerialen が永く Die erbliche Unfreiheit を有して来たこと (K. Bosl, ebenda, S. 603) 従って frei Herren との深い間隙があったこと (ebenda, S. 605) 従ってその社会意識やツルーンが形成されたこと (Ebenda, S. 91-94, S. 137.) また彼等の手に渡った Reichslehen が Allodia 化されたこと (Ebenda, S. 502) 等を補註してなす。〕